

目標分解における目標の書きかた

山崎直樹（関西大学）

2020.8.15, ver.0

A. 到達目標の2種類の書きかた

次のような2種類の書きかたがあります。

1) 「～できる」型

- 自分の名前を学習目標言語の使用者がわかるように表記することができる。
- 「日本の高校生はどのような毎日を過ごしているのか」と聞かれたとき、日課などに関して、「自分自身のこと」を語ることができる。

2) 「～する」型

- 自分の名前を学習目標言語の使用者がわかるように表記する。
- 「日本の高校生はどのような毎日を過ごしているのか」と聞かれたとき、日課などに関して、「自分自身のこと」を語る。

1)はいわゆる「can-do能力記述文」です。2)は単に「行為」を表示しています。「今は、みんな『can-do能力記述文』で書くんですよね？」……そういう考えかたはやめましょう。この2種類の書きかたは、かなり性質の異なる2種類の目標を表示しています。何が異なるか……目標を達成したかどうかを確認するための評価の方法が異なります。

B. 2種類の目標記述と2種類の評価

B-1 「～できる」型の意味と評価方法

これは、「～することができる」というのは「**能力型の目標記述**」です。つまり、この目標に達成したということは、「同様の課題が与えられたばあい、自分でもういちどできる」ということです。簡単にいえば、「**保持**」（身についた）と「**転移**」（他に応用できる）を保証するということです。

評価方法も、とうぜん、「**保持**」「**転移**」を確認する評価方法になります。

B-2 「～する」型の意味と評価方法

これは、ことばどおりに解釈すれば、何かを試してみるだけでいいので、「**体験型の目標記述**」です。やってみればよい、成果物が指定されているのであれば、成果物ができればそれでよいということです。

この評価方法は……言語表現に関わる目標のばあい、「やってみればよい」目標というのはどう評価すればよいのか……わからないですね。

B-3 どちらの型の目標記述がよいのか

これはもちろんどちらがよいとか、そういう問題ではありません。注意したいのは、例えば、「～を調べて、～についてレポートを書く」という活動をするばあい、成果物を作ることが目標なら、「～を書く」という「**体験型の目標記述**」でいいでしょうし、自力で同様の課題を遂行できることを保証したいのであれば、「～を書くことができる」という「**能力型の目標記述**」が必要です。後者のばあいは、（そこまで保証するのであれば）責任がかなり重大になりますが。